

カウンセリングにおける専門性の獲得プロセス

- 中断場面に注目して -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
竹内 宏樹

カウンセラーの専門性とは何であろうか。ドナルド・ショーン(1983)によると、実践的な専門家であるカウンセラーはクライアントが抱える複雑で複合的な問題に「状況との対話」に基づく「行為の中の省察」によって対処している。カウンセラーがカウンセリングの場で行っていることは複雑で、臨床現場においての実践で使われる技術はいわば職人技として経験的に体得されているのが実情だろう。カウンセラーは日々の実践の中でどのように専門性を高めているのだろうか。本研究では、カウンセラーの多くが出会うカウンセリングの中断場面に注目し、それをカウンセラーがどのような体験としてとらえているのかを明らかにすることで、カウンセリングにおける専門性を獲得していくプロセスを明らかにしていく。

調査は、臨床心理士4人と相談室に勤務する他職種2人の計6名に半構造化面接によるインタビューによって行った。まず収集された個々の語りをKJ法によって統合し図解化を試みた。そしてその分析を参考に個々のストーリーを叙述した。

その結果からは、カウンセラーの実践内容とそれぞれの心象が浮き彫りにされるとともにカウンセリングの個別性や特殊性が明らかになった。そして4人の協力者に共通して語られた体験は、中断という場面はとてもショックなものであること、専門性が他職種に理解されにくいこと、中断は日々の実践を振り返るきっかけになるということ、サポート源のなさなどであった。また経験年数の違いによる検討では、年数を経るごとに自己理解が深まり自己一致へとつながっていくこと、クライアントとのバウンダリーを大事にできるようになること、などが示唆された。さらに語りの分析からは、カウンセリングの専門性として、専門知識や技術を棚上げしてひとり人間としてクライアントと対峙するということが、そして、自らの体験を振り返ることによって共感性を高めていくということなどが見出された。

このような専門性を高めるためには旧来の教育システムでは難しい。中断をはじめとするカウンセリングの場で起こる現象を振り返り、語り直すことが可能な「学びの場」が必要である。実践的な専門家の特徴と役割を理解し、ともに内省しともに学びあう場である「専門的コミュニティ」の存在が、多元・流動的な判断を常に求められるカウンセラーを支えていくことになる。カウンセラーは、カウンセリングに対する振り返りを自ら課し、協働で取り組んでいくことで、その体験を次の臨床場面に活かしていくことができるようになることが示唆された。